

mousou no ichiya

# 妄想

津村修二

短編小説

の

# 一夜

mousou no ichiya

津村修二 短編小説 「妄想の一夜」

目次

序章	「始まり」・・・・・・・・・・	4
第一章	「田舎の町にて」・・・・・・・・	6
第二章	「幽霊屋敷」・・・・・・・・・・	18
第三章	「脱出」・・・・・・・・・・	39
第四章	「束の間の楽園」・・・・・・・・	43
第五章	「満月と県道と幻覚と」・・・・	50
第六章	「悪夢の中で」・・・・・・・・・・	58
第七章	「疑心」・・・・・・・・・・	62
第八章	「楽園、再び」・・・・・・・・・・	70
第九章	「勝利の朝」・・・・・・・・・・	79
第十章	「来訪者」・・・・・・・・・・	84
第十一章	「誓い」・・・・・・・・・・	92
第十二章	「愛する人」・・・・・・・・・・	95
第十三章	「結末」・・・・・・・・・・	99
最終章	「それから」・・・・・・・・・・	102

序章 「始まり」

人間には想像力がある。想像力には無限の可能性がある。それは希望とも言えるが、また恐怖とも言えるのではないか。

宇田川智樹。二十七歳。彼は小説家を目指していた。

アルバイトで口を糊しながら小説を書き、コンテスト等に応募する日々を過ごしていた。

事実、何度か入選もした。そのことが彼にとっては精神的な支えとなり、希望となり、その夢を捨てきれずにいた。

とは言っても、現実には厳しいものである。霞を食っては生きていけない。

三人兄弟の末っ子なのだが、上の二人はもう結婚もして家を出ていた。

いつまでも就職もせずに浮草のようにふらふらとしている彼を、両親や上の二人の兄弟は、口では応援すると言いつつも、やはり本心では良くは思わなかった。

いつかは区切りを付けなければならぬことは、智樹にも痛いほどわかっていて、何か早くきっかけを掴まなければ！

そんな漠然とした見えない不安や焦りが、日に日に彼を襲った。

先日書き上げた渾身の作品も出版社へ送ったが、未だに音沙汰無しだ。そうして、この夏に一大決心をした。

「次の小説で最後だ。もし次がダメだったら、その時は諦めよう」  
智樹は、次の小説に全てを懸けることにした。

## 第一章 「田舎の町にて」

七月二十五日。午後二時三十七分。

アルバイトを辞めた智樹は執筆活動に集中するべく、生まれ住む福岡から電車で三時間ほどの佐賀県中央部に位置する、南田村の母方の祖父母の家へ向かっていた。

祖父母は共に智樹が幼少の頃にすでに他界していたが、家だけは今も残っており、年に何度かは家族で訪れていた。

両親は売却も考えたそうだが、資産価値が無いため、売却はしなかった。

それに、電気、ガス、水道等の基本使用料金やその他諸々の諸経費を合わせても、大した額では無かったし、それなら、そのまま残しておこうということになったのだ。

そのため普段は無人の空き家と化していて、集中を必要とする執筆活動において、まさに絶好の場所だった。

彼はこの都会の喧騒を離れた山村の田舎の一軒家に住み、思う存分に

執筆活動に取り組むことにした。このことは同居する両親にも告げてあり、

彼にとっては一世一代の勝負とも言えた。

午後五時五十分。

智樹は寂れた無人の南田駅に立っていた。待合室の椅子は老朽化が進み、背もたれの鉄板が錆びついたその様は、村の過疎化を露骨に象徴していた。

家まではここから歩いて十分ほどだ。

家へと続く坂道を歩いた。蝉の声が良質のBGMとなつて、智樹の足を軽くした。

しかし、まだまだ暑い。夕刻であるが、登る度に汗が噴き出してくる。

日頃から慢性的に運動不足の彼にとっては酷であった。

坂の上まで登った智樹は、そこから下を何気なく見下ろした。そこには絶景があった。

光り輝く夕陽のオレンジのグラデーションに照らされた美しい山々と、

緑の海とも形容できる広大な田園風景が織り成す自然の妙であった。

背負っていたリュックサックからカメラを取り出すと、カシヤツと、

その完璧な被写体を撮影した。

「本当、最高だね」

感嘆するように、撮影後には決まってこう漏らすのだった。

智樹の趣味の一つに写真がある。高校時代は写真部にも在籍していた。

多くは自然の風景だ。こうした趣味も単純に写真が好きだということもあるが、

何より小説の自然描写に役立つとも思っていた。

午後六時五分。

家へと着いた。築四十年は経つ古めかしい二階建ての家だ。

前回到両親と訪れたのが去年の十一月。久しく来ていなかったで、雑草が鬱蒼と生い茂り、玄関には蜘蛛の巣まで張つてある。

廃墟と言えばそう見えなくもない、そんな不気味な佇まいをしている。

近隣にはぼつぼつと家がある程度で、ほぼ孤立した場所にある。

鍵穴に鍵を差し、玄関の扉を開けた。

中からモワツとした空気とカビ臭い匂いが出ていくのを感じた。

家の中は仄暗かった。カーテンで全て閉め切っているからだ。

居間に滞在用の荷物を置いた後、家中のカーテンや窓を開け、換気した。

外から運ばれてくる涼やかに薫る風と草木の潤った匂いが、彼を歓迎した。居間に寝転び、その憩いの歓迎会をひとしきり楽しんだ。

これからここで始まる、執筆生活への期待に胸を弾ませながら。

家の中には居間の他に仏壇の置いてある座敷と洋風な応接間、トイレ、風呂、台所があり、二階に子供部屋と寝室がある。智樹はまた全てのカーテンと窓を閉めた。

午後七時十分。

「今夜は満月だ」

夕闇が包むのは早いもので、家を出ると寸刻の間に外はすっかり形相を変えていた。今夜は綺麗な満月だった。リュックサックからまたカメラを取り出し、撮影した。そして、お決まりの常套文句を言うのだった。

「本当、最高だね」

智樹は心躍っていた。月が自分を祝福してくれているかのように思えて。

北本町へと二十五分ほど歩いた。

家から北本町へは曲がりくねった坂道、通称、蛇坂（へびざか）を通ると、最短で着くが、散歩がてらに遠回りをして歩いた。

北本町は昔ながらの商店街があり、飲食店やスナックが軒を連ねている。

「へえ、こんなところにもあのファミレスが出来たのか」

そこには全国チェーン展開しているファミリーレストランのレストラン・Jがあった。

北本町は都市開発が進み、道路が整備され、見慣れぬマンションも建設されていた。駅も新しくなっており、バリアフリー化され、エレベーターまである。

ここ数年で北本町は新旧が入り混じったような町へと変貌を遂げていた。

智樹は夕食をとるのと、今後の滞在生活の食料品と生活必需品の買い出しを目的に、この北本町まで来ていた。

午後七時三十七分。

以前に家族と一度だけ来たことのある老舗の洋食店「アムール」へと入った。

この洋食店は北本町商店街の一角に位置している。

店内はテーブル席が十席ほどあったが、その全ての席が埋まっていた。

そう、ここはこの地元で人気のお店なのだ。このお店のオーナーが、

某一流ホテルの料理長をやっていた人らしく、それゆえに料理も格別に美味しくて、どことなく店全体にも品格が漂っている。

カウンター席へと腰を掛けた。

「いらっしやませ。ご注文はいかがなさいませしょうか？」

「あ、このカレーBセットをお願いします」

「ドリンクは何になさいますか？」

「アイスコーヒーで」

「はい、かしこまりました」

そのオーナーの奥さんであろう人だろうが、応対もさすがに丁寧である。

年齢的にもう六十過ぎだろうが、年相応には見えず若い印象を与える。

きつとやりがいのある仕事の持続が彼女の若さの秘訣なのだろう。

料理を待っている間、三日前に買い換えた携帯電話をいじっていた。

智樹は機械にはとことん疎い。電化製品全般に暗い。

テレビ番組の予約録画の仕方がわからない、といったのは序の口だ。

いつの日か、パソコンの電源が何をやっても入らないのでサポートセンターの人に  
来てもらったことがあったが、その時は電源をコンセントに差してなかったのだ。

それから、プリンターのインクが切れた時には補充できることを知らずに、

プリンターの本体自体を新しく買ったことさえあった。

彼はどこか天然というか、世間知らずというか、浮世離れしていた。

自分でも自覚はあるが、またそこが小説家志望の人間としては気に入ってもいた。

非凡で稀有だからこそ面白いものが書ける、そんな悦があった。

「お待たせ致しました」

カレーBセットが運ばれてきた。Bセットにはサラダとドリンクが付いている。ちなみにAセットにはこれにデザートが付くが金欠のため遠慮した。

カレーを注文したのには理由があった。以前食べた時にその美味しさに深く感動したからだ。カレーのメインの具であるビーフが特大で、噛んだ時に口一杯に広がる甘味が堪らないのである。スパイシーな香りが食欲を誘い、サラダとともに一気に食べ尽くした。食後のアイスコーヒーもまた最高に美味しかった。

伝票を持って席を立ち、会計を済ませると尋ねた。

「この近くに、食料品なんかを売っているところはありませんか？」

さっきこの辺りで食料品や生活雑貨品を扱っているところを探したのだが、全くそんな所が見当たらなかったの聞いてみることにしたのだ。

去年来た時まではあった小さなスーパーマーケットも、今は駐車場になっていた。そこを当てにしていたのだったが、物の見事に当てが外れた。

「このお近くですよ？お近くですと、何かあるかしら・・・お車ですか？」

「いえ、歩きです」

そう答えると、厨房からオーナーが顔を出して開口一番でこう言った。

「ドラッグストアなら、ここからちよつと歩きますが、ありますよ」

コック帽を被った白髪交じりのイメージ通り品の良さそうなオーナーだ。声も落ち着きがあつて渋い。人生の酸いも甘いも熟知したような印象だ。

オーナーは親切になおも続けてこう教えてくれた。

「それから、そこからまた更に山道方面へ行つたところに、コンビニ・Kもありますよ」

「あ、そうですか。ありがとうございます。」

それなら、ここから一番近いドラッグストアに行きたいと思うのですが」

「ドラッグストアですと、この角を曲がつて、線路沿いをずっと真っ直ぐ行つたところの左手に踏み切りがあつて、そこを越えたところにあります。大きな電飾の看板がありますから、すぐわかると思いますよ」

「ご親切にどうもありがとうございます」

そう御礼を言うと、洋食店を後にした。

午後八時三十一分。

智樹はオーナーの教えてくれたドラッグストアにいた。

オーナーの言う通り、北本駅を横目にした線路沿いを歩き、左手の踏み切りを越えたところに、

煌々と派手な電飾看板が目立っていたのですぐにわかった。

人の温かさが心の琴線に触れて、ドラッグストアまでの道中で何度か感涙しそうになった。彼は精神的に脆い。脆過ぎるのだ。

感受性が強いとも言えるが、ちよつとしたことで一喜一憂してしまう性格だ。

特に最近が良い小説を書かなければという強迫観念によつて、

一定の緊張状態が断続的に続いているため、不意な優しさには弱かった。

常にどこか自分が社会から肯定されていないという思いがあつたため、

誰かに優しくされるだけで、まるで毛布で全身を覆われるように温かく感じるのだった。

パンやお菓子、お茶、缶コーヒー、ジュース、虫よけスプレー、トイレットペーパー等、しばらく暮らせるだけの食料品や生活必需品を買い込み、店を出た。

午後八時四十七分。

ドラッグストアを出た後、闇夜に浮かぶ満月を見つめながら、

重たい買い物袋を両手にぶら提げて、てくてくと家へと歩いた。

ドラッグストアはあの洋食店から更に十五分ほど歩いた場所にあり、家まではかなりの距離を歩くことになった。

ようやく洋食店まで戻ってきた頃には足もパンパンになっていた。

早く家でゆつくりしたい、そう思うと同時にあの不気味な家が脳裏に浮かび、歩を進めるごとに少しずつ不安な気持ちが増食してきた。

思えば、智樹が一人きりであの家に泊るのは初めてだ。

泊る時にはいつも両親がいた。兄弟がいた。一人では無かった。

勢いでこの計画を立てたわけだが、あの家に一人で泊る恐怖は考えもしなかったわけで、それは大きな誤算だとも言えた。

帰りは近道である蛇坂を通って帰ることにした。

沿道には川が流れ、その向こうに北本駅と南田駅を繋ぐ線路がある。坂の上に位置する智樹の家まで歩きながら、彼はポツリと言った。

「確か、この辺だったよな」

蛇坂の頂上付近に心霊相談所というのがあるのを思い出した。

智樹の勘は奇しくも当たった。確かに沿道にそれは存在した。

心霊相談所とは心霊写真鑑定や浄霊、除霊、お祓い、お清め等を行なう場所である。悪霊、霊障、憑依、心霊関係全てにおいて霊視を行い、その後でこういった対処方法を行なっていく。怨霊や怨念の類にも対応している。

この心霊相談所は智樹が幼少の頃からずっとある。ずっと疑問だった。一体誰がこんな辺境のこんな怪しげな場所に来るのだろうか。

現在でも「心霊相談所」とボロボロの看板だけは出ているようだが、劣化が酷く、とても相談所を営んでいるとは思えない。

人が住んでいるのかも怪しいほどだ。つたが絡まり入口がどこかもわからない。

しかし、案外こういったところに強力な霊媒士がいるのかもしれない。

外観の悪い店ほど料理が絶品といったこともよくあるからだ。

そう考えてはみたものの、この外観はあまりに異様だった。

もしも、ここで心霊現象の一つでも起きたなら・・・と急に恐ろしくなった。

その場所の横を通る時、そちらを極力見ないようにして早歩きましたが、ちようどその時、両手に持っていた買い物袋が急激に重たくなった。

下から物凄い力で引っ張られている！

「うわっ！」

智樹は悲鳴を上げて買い物袋を振り回しながら、家まで全力疾走で駆け抜けた。

## 第二章 「幽霊屋敷」

午後九時十四分。

家は夕刻に見たそれとは違う姿で智樹を迎え入れた。

飛び出しそうな心臓の鼓動を押さえながら鍵を鍵穴に差した。

鍵がなかなか入らない。手がガタガタと震えていた。

決死の思いで鍵を開けると、靴を脱ぎ、黒一色の家の中へと入って行った。

次第に慣れていく視力を頼りにブレイカーのある台所まで走った。

ブレイカーを上げ、台所の電気をつけ、すぐに居間へ行き、居間の電気をつけた。

明るさは彼を平穏にした。徐々に落ち着きを取り戻し始めた。

「あれは一体何だったのだろう・・・」

居間に座り、買ってきたペットボトルのお茶を飲みながら考えた。

あの時何が確実に引つ張っていた。やはり心靈現象なのか？

そんな詮索をしていると段々とまた恐怖の海に飲み込まれそうなので、

テレビをつけることにした。真空の中のような無音空間が怖かったのだ。

テレビはいかにも古さを感じさせる骨董屋にありそうな旧型のテレビだ。

コンセントに電源を差し込み、テレビの右側に付いている電源のつまみを引っ張った。今時、引っ張って電源が入るテレビなんて珍しいだろう。

智樹は「引っ張る」という行為にまた先程のシーンを連想させて怖くなった。

「いや、関係ない、関係ない」

自分にそう言い聞かせるように言った。

電源ランプが点灯し、テレビ画面に砂嵐がパッと映ると同時に、ザザーツという不快なノイズ音が鼓膜を襲った。

「うわっ！」

慌てて音量のつまみを小の方へ回した。

「心臓に悪いから・・・勘弁してくれ」

それはさして大きな音量ではなかったが、この静穏の中では大きく感じた。チューニングのつまみをゆっくりと回し始めた。

砂嵐から臙げにスタジオのような映像が見え、人の声が聞こえるようになった。そこで回すのを止めた。映像は白黒で横筋が入り、所々歪んでいる。

音声ははっきりとは聞こえるが、時折ジジッとノイズがする。

これが妥協点であることは智樹も重々わかっていたので、別に悲観することも無かったのだが、この事態においてはもう少しクリアであって欲しかった。

いや、しかし今の彼にとっては何とも心強い味方だ。高望みはしなかった。

映したのは民放のバラエティ番組だった。

せめて明るい番組を見ていたかったのだが、問題が発生した。

テレビから聞こえてくる言葉が全くもって別の国の言葉で聞こえてきたのだ。

要は全然何を話しているのかわからないし、頭にも入って来ない。

例えばインフルエンザで寝込んでいる時にテレビを見ていても、

その内容が右から左に流れていくような、あの感覚だ。

「落ち着け、落ち着け。何も怖いことなんてないからな」

自分を鼓舞するようにそう言うと、ペットボトルのお茶を飲み干した。

午後九時三十二分。

世界一早い前言撤回をした。親友の衣岡順一へと携帯電話から電話を掛けた。

トゥルルルル、トゥルルルル、トゥルルルル

呼び出し音が数回鳴るが出ない。いつもなら、すぐ出るのだが。

「・・・はい。もしもし？」

やっと順一が応答した。

「もしもし」

「あの、失礼ですが、どちら様でしょうか？」

「冗談きついな、僕だよ。智樹」

「ああ、トモか！」

「そうだよ。一瞬、間違い電話を掛けちゃったかと思ったよ」

「お前、番号違うから、わからなかったよ」

「え？ああ、最近携帯買ったからな。でもさ、メールで番号変わったって、ジューンにも連絡しておいたよな？」

「ああ！あのメールお前だったの？」

「何で？」

「お前、メールアドレスも変えてあるし、単に番号変わりましたっただけで、名前入れてなかっただろ？」

「あっ、そう言えば・・・」

「知らないメールアドレスから番号変わりましたっって、言われてもさ」

「ごめん。うっかりして」

「お前、そういうところあるよな・・・で、何だよ？恋の相談か？」

「違うよ！・・・いや、何っていうわけではないけど。実はさー」

智樹はそれから一部始終を順一に吐露していった。  
とにかく独りが怖かった。誰かに話を聞いて欲しかったのだ。  
水を得た魚のように舌は渴く間もなく動き続けた。

智樹と順一は幼馴染みで小学校も中学校も一緒だった。

勉強の出来た順一は高校から智樹とは違う人生を歩むことになった。

高校は名門の進学校へと進み、その後、某一流大学の経済学部を卒業後、

大手の広告代理店へと勤め、現在は営業主任を任されていた。

未だ独身だが、二年ほど交際している佐恵という女性がいて結婚も近かった。

智樹と順一は何もかもが違っていたが、不思議と馬が合った。

智樹は堅実に安定した道を歩く順一に憧れを持っていたし、

順一は自分の夢にがむしゃらに向かう智樹を羨望の眼差しで見っていた。

月に何度かは飲みに行ったり、遊びに行ったりする仲だった。

「なるほどね。それは俺でも怖いよ」

話を聞き終わった順一はそう答えた。そして続けた。

「もうさ、帰ってこいよ。お前、車で来たのか？」

「いや、車持っていないからな。長期間、親の車を借りるわけにはいかないし」  
「ああ、そうか。じゃあ、電車か？終電ありそうか？」  
「こんな田舎だから、終電もたぶん無いと思う」  
「そうだよなあ。そっか・・・じゃあ、俺が今からそっち迎え行こうか？」  
「いやいや、それは悪いよ」  
「遠慮しなくても良いぜ？」  
「あ、本当に大丈夫。気持ちだけで嬉しいよ」  
「でも、お前・・・」  
「大丈夫だって。それに、ジュンと話してたら怖くなくなったよ。だからさ」  
「無理してないか？」  
「いや、本当大丈夫だから。ありがとう」  
「じゃあ、まあ今日はとりあえず、さっさと寝ろよ」  
「ああ」  
「怖い時は何も考えずに寝るのが一番だ。お前はいつも考え過ぎだよ。さっきの引っ張られたって話もお前の疑心暗鬼だよ、きつと」  
「そ、そうだよな！どうかしてただけだよな、絶対」  
「そうそう、気にするな。まあ何かあったらまた連絡くれよ」  
「おう、ありがとう」

「良い小説書けると良いな。じゃあ、またな」  
順一の言葉に強く後押しされ、巻き付いた恐怖の黒い糸が解けた気がした。

午後十時十分。

順一の言う通りに寝ることにした。

座敷の向こうにある押入れから布団を取り出して居間に敷いた。

座敷で寝るのは仏壇があるため、気が引けた。

二階に寝室もあるが、今は実家の倉庫代わりの物置と化して使用できない。

「明日は布団干そう」

しばらく押入れに入れっぱなしだった布団はあまりに不衛生だった。

居間に布団を敷き、そこに横になった。

テレビの内容は着実に日本語として理解できるようになっていた。

「それにしても暑いな・・・あ、そうだ」

座敷に置いてある扇風機に気が付き、立ち上がって居間へ運ぼうとした。

電気をつけて扇風機を運ぼうとすると、その扇風機の奥に置いてあった何かが倒れかけた。

透明のケースに入った少女の日本人形だった。ビクツとしてその手を止めた。

「何だよ、これ。気味悪いな」

ケースは壊れ、前面が空いており、ケースごと斜めに傾き、

前にある扇風機があるために倒れずに済んでいる、そんな危うい状態で支えられていた。

この日本人形はケースの横にゼンマイが付いていて、ゼンマイを巻いて放すと、

オルゴールのように音が鳴り、その少女が動く仕掛け人形だ。

智樹も子供の頃は何度か楽しんだこともあるが、今楽しむほどまでの余裕は無い。

結局、扇風機を動かさずに座敷から居間に向けて「強」で風を送った。

居間へと戻り、目を瞑って寝ようとした。

暗闇が怖いので電気はつけっ放しにして、

静寂が怖いのでテレビはつけっ放しにした。

全く眠れなかった。眠れるはずがなかった。

智樹は暗くないと眠れないし、静かじゃないと眠れない体質だった。

眠るための暗さと静けさはその代償としての怖さを生む。

「眠る恐怖」を取るのか、「眠らない安堵」を取るのか。二者択一だ。

この二項対立の問題をとりあえず後回しにし、

テレビを見ながら、まずは一旦気持ちを落ち着けようとした。

しかし、「眠る」という恐怖からの有望な脱出手段が失われようとしている。  
「またもや、テレビは外国語を伝えるようになっていた。」

そんな折、台所と居間の間にあるガラスのドアから、突然、

「ミシミシと音がし、更にピキピキピキとガラスが振動で揺れた！」

即座に察した。これはラップ現象だ、と。

ラップ現象とは誰もいない部屋や何も存在しない空間において、  
ある種の音が発生する現象であり、その音の発生原因が不明のために、  
専門家の間では死者の霊魂によるものではないかとされている。  
何らかのメッセージを音によって霊魂が伝えているのではないか、  
という解釈をしている心霊研究者や霊能者は多い。

智樹は以前にもラップ現象を目の当たりにしていた。

五年前の夏のことだったが、一人で墓参りに行ったことがあった。

こういった仏事はいつも家族で行くのだが、

その前日の夜の情報番組で「墓参りで運氣アップ！」という特集をやっていて、

それに見事に感化され、その持ち前の性から、すぐさま実行に移したのだった。アルバイト後だったので、辺りはすでに墨を流したような無明の闇であった。夜の墓地に一人墓参りとは、元来怖がりの智樹にとっては苦行そのものだったが、それでも背に腹は代えられぬと、運氣アップのために墓掃除をし、経文を唱えた。

その時だった。智樹の後ろにあるガードレールから、バチバチバチバチと音がし、ガードレールが振動した。

「何、今の・・・」

居ても立ってもいらなくなり、経文も未だ終わらぬうち、常闇の墓から疾風の如く立ち去った。

そして後日、インターネットでそれがラップ現象だと言われるものだと知った。

それからというもの、ラップ現象に対して過剰なまでに敏感になり、ちよっとした壁の軋む音などにも、身の毛のよだつような悪寒が走るようになっていた。

だが、ラップ現象は科学的解釈の出来る錯覚の可能性が多く、例えば木造住宅の場合、その骨格に使用された材木の乾燥が不十分で、その乾燥が長い歳月の中で徐々に起こり、それが材木のひび割れの原因となって軋むような音がする、そういったことも多々あるのだ。

しかし、彼は科学よりもオカルトを信ずるオカルティストだった。そういった科学の見解さえ無意味なものでしかなかった。

智樹は居間で一人、絶望の淵に立たされていた。

「きつと、さっきの心霊相談所の前で何かに憑かれたに違いない」  
狼に襲われる子羊同様にぶるぶると震えていた。

そして、見えない何者かに許しを乞うように言った。

「ねえ、一体、僕が何をしたら言うの？もうさ、止め・・・」  
そう言いかけた瞬間、電話が鳴った！

リリリリリン！リリリリリン！リリリリリン！

心臓が止まりそうだった。それは智樹の携帯電話ではなく、  
玄関に置いてある黒電話からの呼び出し音だったからだ。  
普段聞き慣れ無い耳を劈くような金属音が家中に響く。

電話回線はとつくに切つてあるはずだ。鳴るはずが無い。  
でも、今確かに鳴っている。ポルターガイスト現象か？

リリリリリン！リリリリリン！リリリリリン！

電話に出ないことにした。幽霊からの電話に決まっている。

「私がお前を呪い殺してやるのよ！ヒッヒッヒッ」

なんて言われたら、それこそ一貫の終わりではないか。

リリリリリン！リリリリリン！リリリリリン！

なかなか幽霊も諦めない。

「もういい加減諦めてくれ。そんなに僕が憎いのか」

半狂乱の状態になり、両手で耳を塞いで布団に潜り込んだ。

リリリリリン！リリリリリン！

電話は切れた。尋常ではない量の汗が流れた。

「はあ、はあ、はあ・・・助かった」

九死に一生を得た気分だったが、先は未だ見えない。

途方もない絶望が待っているだけだった。

「やはり、今の電話はポルターガイスト現象か？」  
そんな懸念を抱いた。

そもそもポルターガイスト現象とは、

心理的に不安定な人物の周辺で起きるケースが多いとされている。

その人物が無意識的に用いてしまう念力のようなもので、

それによって超常現象を発生させてしまうのだ。

だとすれば、先程の電話の説明もつく。智樹はそういったオカルト的現象への造詣は深かった。

心霊現象にラップ現象、おまけにポルターガイスト現象だ。

非現実的な現象が次から次へと襲いかかる。

さっきの順一との電話が遠い昔の幸せな出来事のように思えた。

あの時、順一の優しさに甘えて迎えに来てもらえば良かったと後悔した。

再度、順一に電話を掛けようかとも思ったが、しかしながら親しき仲にも礼儀ありだ。

それはあまりにも図々しく、親友とはいえ、

いまさらこんなところまで迎えに来てほしいなどとは言えなかった。

それだけでなく電話自体、迷惑に決まっているはずだ。  
やはり一人でこの恐怖と戦うことにした。

午後十時五十三分。

相変わらず居間のテレビからは外国語が流れている。

気を鎮めながら、この一夜をどう乗り切るか考えていた。

例の「眠る恐怖」と「眠らない安堵」の問題だ。

仮に前者を選択したとして、こんな状況で電気もテレビも消して果たして眠れるだろうか。

答えはノーだ。

漆黒の闇の中、発狂するのは間違いないだろう。

では、後者だ。電気もテレビもそのままでこうやって朝までやり過ごす。

悪くない。ギリギリではあるが、その可能性はゼロでは無い。

何とか外国語のテレビでも見ながら怖さを紛れさせることは出来そうだ。

彼は「眠らない安堵」を選んだ。

「あ、どうしよう・・・」

不意に尿意が襲った。思えば、ずっと用を足してなかった。

洋食店で飲んだコーヒーの利尿作用も少なからず影響しているだろう。

「今度は生理現象かよ」

自虐的な引き攣ったような笑いを浮かべた。

トイレは汲み取り式便所で俗に言うポットン便所だ。下から何が出てくるかわからない。

「絶対あんな便所なんか行けないよ・・・」

ふと目の前にある、飲み干したお茶の空のペットボトルを見つめた。

「仕方ない、こんな状況だし・・・」

ペットボトルを持って気持ち良くその中に放尿した。

思いの外、自分でも驚くほどかなり勢いのある大量の放尿であった。

ガシャーン！

その放尿中の智樹の後ろで大きな音がした！

パツと後ろを振り向くと、座敷で回っている扇風機の後ろの日本人形のケースが倒れていた。

「強」で回り続ける扇風機の微振動がケースを徐々に傾かせ、

遂にはケースごと倒れたのだった。

「またポルターガイストか！」

もはや論理的な思考は残されていないかった。

ペットボトルをそのまま持ったまま、体だけ後ろに向いたため、

智樹の尿はペットボトルの口を外れ、畳にぶちまけられた。

ちようど畳に置いていた携帯電話に命中してしまった。

まだ買ったばかりのお気に入りの携帯電話だった。

びしょびしょに濡れたその携帯電話を手に取り、智樹は言った。

「防水加工で良かったあ」

三日前、携帯ショップの店員に勧められて防水加工の携帯電話を買ったのだが、

こんなところでその恩恵を受けることになるとは夢にも思わなかった。

しかし、防水加工の携帯電話にはアンモニア臭だけは残った。

「せっかくなら防臭加工も付けといてくれればな・・・」

午後十一時三十一分。

尿問題が一段落した頃、テレビを見ながらふと呟いた。

「あ、でもテレビもいつまでもやって無いよな・・・」

確かにそうだった。深夜になれば当然放送時間は終了する。

智樹は想像した。

カラーバーを見続け、あの「ピー」という一定の電子音を聞き続け、ただそれだけをこの居間で夜中ずっとやり続ける自分を。

カラーバーと言つても白黒にしか映らない、言わばモノクロバーである。しかも砂嵐が横たわり、時々ノイズ音が入るテレビなのだ。

「なるほど。これでは危ない人になってしまう」

想像するだけでこれは常軌を逸した危険な行為だと思った。

ただでさえ恐怖に怯えた人間が、こんな自殺行為と言つても過言ではない、危険な行為を長時間繰り返すとしたなら確実に精神崩壊してしまうだろう。

これは大袈裟でも何でもなくて、精神の均衡というものは非常に微妙な脳内の神経活動のホルモンバランスによって保たれている。

人間の精神はそのバランスによって左右される、容易いものなのだ。

「眠らない安堵」さえ奪われた。これで選択肢はもう無くなった。奈落の底に一気に叩き落とされた気分だった。そんな最中、

リリリリリン！リリリリリン！リリリリリン！

また黒電話が鳴った！静寂を切り裂くような激しい金属音だ。先程と同じように両手で耳を塞いで布団へと潜り込んだ。

「ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」  
電話の音を掻き消すように必死に喚き散らした。

リリリリーン！リリリリーン！リリリリーン！

「助けて・・・助けて・・・助けて・・・」  
呪文のように繰り返し唱え哀願した。

リリリリーン！リリリリーン！リリリリーン！

「殺される。殺される。殺されるよ！」  
恐怖に押し潰されそうだった。

リリリ・・・チンッ

心臓を鷲掴みにされているかのように息が出来なかった。

「はあ、はあ、はあ・・・もう無理だ」

午後十一時五十分。

この幽霊屋敷を出ることにした。

先程の二回目の電話が決定打となった。テレビの問題も大きかった。だが、どこへ？田舎のこんな時間に。

頭の中をフル回転させた結果、北本町で見たファミリーレストランを思い出した。

「あそこなら深夜営業もやってるだろう」

携帯電話を取り出し、そのレストラン・Jを検索した。

火事場のクソ力と言うのか、人間追い詰められたら機転が利くものだ。

ホームページになかなか営業時間を見つけたことが出来なかったため、掲載されている北本町店の電話番号に電話を掛けた。

呼び出し音が鳴る。中年の女性店員が出た。

「いつもありがとうございます。レストランJ・北本町店でございます」

「あ、あの、え、営業時間は、な、何時までですか？」

「当店、深夜二時までとなっております」

「あ、本当ですか！そ、それじゃあ、今から行きますので」

「はい？は、はあ・・・」

気が動転していたので、しどろもどろだった。

別に今から行くことを宣告する必要も無かったのだが、

何だか、この地獄から抜け出せる気がして天にも昇る気持ちだったのだ。

闇のはるか彼方にある微かな一筋の光。

今の智樹にとって、その中年女性は救いの女神だった。

電話を切り、座敷へと向かった。扇風機を止めるためだ。

横には倒れた日本人形のケースがある。このままにしておくのも何だか不吉だ。

とりあえずケースを起こした。その時、その幼女とバチツと目が合った！

その瞬間空気が変わった。腕に鳥肌がゾツと立った。

何者かが奥からこちらをジーツと見ているのだ。

風呂場で髪を洗っていて後ろに誰かいるのではないかと感じる、あれに似ている。

「誰！？」

智樹の声だけが無情にも座敷の中で響いた。

さつと扇風機を止め、座敷の電気を消して居間へ戻った。  
携帯電話を後ろのポケットに入れて、リュックサックを背負い、  
そしてテレビの電源を押して止め、居間の電気も消した。  
その間もあの何者かの粘着質な嫌な視線はずっと向けられていた。  
今までのテレビの音の無い静けさ、それがまた怖さを増長させる。  
台所の電気も消し、いよいよ真つ暗になった家中で死にもの狂いで走って  
玄関まで辿り着いた時、玄関の黒電話がまた音を立てた！

リリリリリン！リリリリリン！リリリリリン！

三回目の電話だ。腰を抜かして靴が上手く履けない。

「うわあぁっ！」

真後ろにやつがいる！靴を履き、転びそうになりながらも玄関を出た。

そこで初めて今まで玄関の鍵をつけっ放しでいたことに気付いた。

それほどあの時も切羽詰まっていたのだろう。不用心だった。

鍵を掛けると慌てて抜いて、前のポケットに突っ込んで幽霊屋敷を飛び出した。  
誰もいない家中で黒電話はまだ鳴り続けていた。

### 第三章 「脱出」

午前〇時十四分。

飛び出した時に真向かいの神社が目に入った。

その時、母から聞いた話を思い出してしまった。

この家自体は築四十年だが、以前から母は祖父母とここで暮らしていて、

母が高校生の時、それも夏休みのことだったらしいのだが、

この神社でダイナマイト自殺があったらしいのだ。

母の話によれば結婚を反対された若いカップルの無理心中らしい。

その自殺前日の夜には神社から大声で歌のような、

おかしな叫び声のような男女の声が聞こえてきたという。

ダイナマイトは男が鉦山開発の現場から調達してきたらしい。

その当時はダイナマイトによる鉦山開発がよく行なわれていたため、入手出来たようなのだ。

男女は抱き合って腹部にダイナマイトを挟み点火し爆死したらしいが、

それは無残なもので、神社を覆う木々の葉や枝に無数の肉片がぶら下がっていた、という。

母の家の屋根にもその肉片が飛んできたというのだから、凄惨な自殺だったのだろう。

「もしかして・・・さっきの視線はやつらの・・・」  
そう思うとまた寒気がして走り出した。

一刻も早くレストラン・Jへ行くことを最優先し、  
蛇坂の最短ルートを選んだ。また例の心霊相談所が見えてきた。

「あ、そういうことだったのか・・・」  
ここで点と点が線に繋がった気がした。

つまりこの自殺した男女の怨霊がこの村一帯を支配していて、  
その怨霊を取り払うために、ここにこの相談所があるのではないかと。

「なるほどね。僕・・・死ぬね」

静まり返った真夜中の蛇坂を大急ぎで下って行った。

「救いの女神様！どうか、助けて！」

祈るような思いで何度も何度もそれを発しながら走った。

得体の知れない未知なものほど怖いものは無い。

人間は何か形や意味を与えられてこそ、安心するものだ。

不可思議な現象、原因不明の死、無動機の殺人、自らの人生そのものなど、  
人間は安心したいがために、それらに意味や理由を付けて納得させる。

様々な学問はそうやって人間の安心のために発展してきたのかもしれない。

宗教だつて、その安心したい、という心理の表れではないか。

智樹の後ろにはピタリと並走している得体の知れない何かがあった。

そう、人間が最も恐れる形も意味も不明な、その何かだ。

彼は走りながら、恐る恐る、後ろのそれについて目を向けてしまった！

見えないものを見たい、知らないものを知りたいと思うのは、

人間の遺伝子に組み込まれた本能ではあるが、その中には人間が、

見なくていいもの、知らなくていいものがあるということを忘れてはいけない。

そこには人間が見てはいけない、知ってはいけない世界というものがあり、

その禁忌の世界に土足で踏み込むような真似ごとは、許されない冒瀆なのだ。

まあ、智樹の見たものは、ただの自分の影だったのだが。

午前〇時三十五分。

県道沿いにあるレストラン・Jへの道を走っていた。

さすがは県道だ。街灯も明るいし、車が行き来している。

その中で暴走族の一行が爆音とともにこちらへ向かって来た。

そのうちの一人と目が合った。糸のような一重の鋭い目だった。

目を逸らした。智樹なりの処世術であった。何とか難は逃れたようだ。

こんな時間に一人でうろろうろしていたら、それこそ彼らの餌食だ。

また走るピッチを上げた。そして声を上げた。

「救いの女神様〜！」

ようやく、レストラン・Jの灯りが見えてきた。

それは航海する船を照らす灯台のように、智樹を導いてくれる灯りだった。

#### 第四章 「束の間の楽園」

午前〇時五十一分。

レストラン・Jへ着いた。テーブル席が三十席ほどある。

ごくごく普通のレストランだ。店内は眩しいほどに明るかった。

奥のテーブル席には二人の男が向かい合わせで座っていた。

客はその一組だけで店内は閑古鳥が鳴いていた。

「いらつしゃいませ。お一人様ですか？」

「あ、はい」

「おタバコは？」

「いえ、吸いません」

「あちらが禁煙席となっております。空いているお席にご自由にお座り下さい」  
店内中央のテーブル席へリュックサックを置いて座った。

「はあ・・・何だよ」

腹が立った。「救いの女神」と崇拝したはずの女性は、

お世辞にも女神とは言えない、ただのおばさんだった。

いや、むしろちょっと下品な感じさえする、こんなおばさんに、自分がさつきまで熱くなっていたことに無性に腹が立ったのだ。

これは完全に吊り橋理論による恋愛の法則と同じだ。

吊り橋理論とは、吊り橋の上という生理的に興奮した極限状態にある時、人は恋に落ちやすいという、カナダの心理学者ダットンとアロンによる学説だ。お化け屋敷や肝試し、ホラー映画鑑賞等もそういった意味では効果的だと言える。

ただ、このおばさんとは同じ吊り橋の上にはいなかった。

この場合、僕だけが緊張状態にあったということだ。

あ、なるほど。だから、恋愛感情に発展しなかったのか。

いやいや、こんなおばさんと一夜の情事など、まっぴら御免だ。ちよつと待て、何を考えているのだ、僕は。

あ、今こつちを見て、あの奥のテーブル席の男達が笑ったぞ。

もしかして、あいつらがダットンとアロンなのか？バカにしゃがって。

「お客様。お客様？大丈夫ですか？」

「え？は、はい？何か？」

「さつきから、ずっと独り言のようなことを言われていましたので」  
おばさんからそう言われて正気に戻った。

「あ、すみません。ちよつとばかり考え事を」

「考え事？」

「えっと、まあ、その・・・つまらないことですよ」

女神だの、ダットンとアロンの学説だの、そういう類のことを  
考えていたとはさすがに言えず口を濁した。

「お客様、先程の電話の方ですね？今から行きます、っていう」

「え？・・・あ、はい。・・・よくわかりましたね」

「ふふふ、やっぱり。声や話し方でわかりますよ。ところで、ご注文は？」

「メロンソーダで」

おばさんはニコツと笑って銀歯を光らせると、テーブル席を去った。

おばさんの香水の強烈な残り香が智樹の席に充満した。

おばさんは飲食業に携わる者として完全にアウトなのだが、

食虫植物が虫を惹きつけるために放出する香りのように、

智樹はその香りの虜となってしまうた。

あのおばさん、見ようによつてはどことなくエキゾチックな顔つきで、結構可愛いぞ。鼻が曲がっているが、目がクリつとしていて、はにかんだ笑顔なんて、なかなか魅惑的だ。うん、魅惑的だ。アリかナシかで言えば、アリだ。いや、もうアリのアリだ。さつきは下品とか言つて悪かった。許してくれ。え？いや、許してくれよ。

「お客様？また考え事ですか？」

「え？」

「ずっと独り言をぶつぶつと言われていますよ」

「ま、またですか？・・すみません」

「ご注文のメロンソーダです」

また正気に戻った。顔が赤くなつた。

メロンソーダを飲んだ。喉がカラカラだったので爽快だった。

それと同時に、ここ数時間続いた緊張も一気に緩和された。

今までの恐怖は何だったのだろうか。ここへ来るとそう思えた。

あの幽霊屋敷に比べれば、ここは楽園そのものだ。

人間は常に現状に不満を抱き、理想を求める。ここではないどこか、つまり、楽園を探し求める生き物であるが、こんなところに楽園はあったのだ。だとすれば、やはりあのおばさんは「救いの女神」ということになる。改めて呼ばせてほしい。ああ、女神様。

メロンソーダを僕が飲み干した頃、ダットンとアロンが立ち上がって、レジで伝票を女神様に渡していた。こっちを見て、またニヤニヤ笑っている。そして、女神様と一緒に何やら楽しそうに会話している。

言いようのない嫉妬が襲う。何をあんなに楽しそうに話す必要があるというのだ？でも、待てよ。あいつらが帰れば、この楽園で女神様と二人きりになれる。あいつらにも少しくらい最後の楽しみを与えてあげようではないか。

智樹はこの恐怖に蝕まれて精神が崩壊し始めていた。

二人組の男は独り言を繰り返す智樹を見て、滑稽だと笑っていただけだ。この二人組の男はこの店の常連であり、この中年女性の店員とも顔馴染みであり、この智樹のことをレジで一緒に面白がっていたのだった。

「おばちゃん、あいつ、マジで変なヤツだな」

「そうだね。この店に来る前にも電話でね、今から行きます、って連絡してきたのよ」  
「何でそんなこと連絡してくるんだ？ちくしょう、面白いヤツだな」  
こんなふうにして、ただ単に彼を笑い話の種にしていた。

「あんな人初めてだわ。あ、二人とも今日もお仕事頑張るのよ」

「はい。おぼちゃんもあと少しだけど、頑張りなよ」

「おぼちゃん、あいつ、ちょっと変だから気を付けてね。あつ、あとさ、  
今日はいつもより、やけに香水きつかったよ」

「あら、やっぱり？ごめんね。今日一回香水つけてたのに、  
それを忘れてもう一回つけてしまったのよ。年取るって嫌だね」

二人組の男は店を出て、駐車場に駐車している大型トラックに乗り込んだ。

午前一時四十五分。

窓の外でピカッピカッという白い光を見た。何だろう？

もう一度、窓の外を凝視した。遠くに、道路工事前の点滅のライトがあった。  
ただの勘違いか？一瞬、背筋が凍る思いをした。

閉店時間の二時が近づき、次第に心に闇が押し寄せる。  
楽園ももうすぐ終焉を迎える。永遠など、この世には無いのだ。  
諸行無常。全てのは流動し、変化していくのが世の常だ。

「お客様、そろそろ閉店のお時間ですので」

僕はリュックサックをまた背負うと席を立ち、レジへ向かった。

「お会計、二百八十円です」

僕はその金額を女神様へ渡した。その女神様の左手の薬指には光るリングがあった。  
失恋した。短い夏の恋だった。

「ありがとうございます。またのご来店お待ちしております」  
僕は楽園から追放された。

## 第五章 「満月と県道と幻覚と」

午前二時。

店を出てから県道をたゆたうようにあてもなく歩いた。

交差点の信号はチカチカと黄色信号が点滅している。

車以外誰も通らず、車さえ滅多に通らない。ただ、沈黙だけが支配する空間。道行く街灯だけがその行く手を照らしてくれている。

見上げると、満月があった。相変わらず綺麗だ。嘘みたいに美しい。

だが、その美しさには吸い込まれてしまいそうな恐ろしさも混在する。

美しさと恐ろしさは紙一重であって、表裏一体である。

どこか恐ろしいから美しく、どこか美しいから恐ろしい。

「お前が沈み、太陽が昇るまで、僕はこの恐怖と戦ってやる」

満月に向かって真剣な眼差しで宣戦布告した。

智樹が勝つのか、恐怖が勝つのか。どちらかが死ぬまでの戦いだ。

朝になればすぐにあの幽霊屋敷へと戻り、滞在用の荷物をまとめて、始発で帰ろうと考えていた。あんな幽霊屋敷にもう用は無い。

もともと、小説の執筆はあそこでも出来たのだ。  
両親に事情を説明して、実家に戻って最後の小説を書き上げよう。

とりあえず朝が来るまでだ。それまでの戦いだ。

だが、夜明けはまだ手の届かない、遠い先の先にあった。

午前二時二十四分。

県道を跨ぐ、錆びて腐食した古い歩道橋が視界に入った。

歩道橋には年季の入った自動車の交通安全標語の横断幕が掛けてある。

ふと、その歩道橋の上に人らしき姿を捉えた。

次の瞬間その人らしきものが突然、歩道橋から飛び降りた！両手で目を覆った。

しかし、その飛び降りたはずのその道路への落下音がしない。

目を開けると道路にも歩道橋の上にも、その人らしきものの姿がなかった。

遂に智樹に幻覚症状が表れ始めた。

幻覚とは、実際には存在しないものを脳が知覚することだ。

それによって幻が見える幻視、幻の音が聞こえる幻聴、幻の匂いがする幻臭など様々な症状を引き起こすわけである。

彼は決して精神病患者ではない。ただ、正常な人間であつても、特殊な状況下においては幻覚症状が表れることがあるらしい。

科学的な側面から説明すると、脳内の神経伝達物質である

ドーパミンという物質が幻覚には大きく関係しているようだ。

ドーパミンとは人間の行動の動機付けを行なうような物質で、

このドーパミンが増え過ぎると、幻覚や精神分裂病、強迫神経症、薬物依存症等の症状が発症する。

ちなみに、麻薬、コカイン等の覚醒剤は、ドーパミンを増加させるため、この薬物依存症を発症させる。

よって、精神科ではこのドーパミンの量を調整する薬物を投与し、こういった症状に対して薬物療法で治療していくわけである。

智樹はこの幻覚症状を自覚し、危惧した。

このままでは朝まで自分の精神が持たない、と。策を練った。

どこか人がいる明るいところは無いか？

僅かな記憶を辿った。洋食店のオーナーの顔が浮かんだ。

コンビニ・Kだ！

確か、ドラッグストアから山道方面へ行ったところにある、と言っていた。しかし、田舎のコンビニだ。二十四時間営業しているとは限らない。もし、そこまで行って閉店していたら・・・おしまいだ。

この県道の街灯のある町でも怖いのに、山の中などに行けるものか。営業時間も確認せずにそこへ向かうということは、命綱無しでバンジージャンプするのと等しい。まさに死へのダイビングだ。

命綱は欲しいと、後ろポケットから携帯電話を取り出すと、コンビニ名と地区名を検索バーに入力した。すぐに検索結果が出てきた。とりあえず電話番号がわかったので、そこへすぐさま電話を掛けた。呼び出し音が鳴って、しばらくしたら若い男性店員が出た。

「はい。コンビニ・K北本町店です」

「あ、あのそちら、二十四時間営業ですか？」

「そうですよ」

「た、助かったあ・・・」

「助かった？」

「い、いや、すみません。こっちの問題で。ありがとうございます」

まだ幸運が味方していると思い、ガッツポーズをした。  
天運が強いのか、悪運が強いのか、この際どちらでも良かった。

午前二時四十四分。

コンビニ・Kの場所がわからないのでドラッグストアを目指した。

そこから山の方へ歩けば見つかるだろう。道は一本しか無いのだし。  
もしわからなかったら、また電話でもして聞けば良い。

歩いてきた県道を逆戻りしていた。

しばらく歩いていたら、次第に落ち着きを取り戻してきた。

脳科学でも実証されていることだが、歩行や走行等の一定の運動を始めて少し経つと、脳内ではベータエンドルフィン（脳内モルヒネ）や、先程のドーパミンといった、快楽物質が分泌され、心地良い感覚を脳にもたらす。マラソン選手が感じる、ランニング・ハイ、またはランナーズ・ハイと呼ばれるものが、それに該当する。それから、さらに運動を持続させることで、脳内でセロトニンという、

興奮した脳を鎮めてくれる、リラックス状態を作り出そうとする快楽物質が生成される。

つまり、歩行や走行といった一定の運動の持続はこれら快楽物質の循環の働きを促し、脳を活性化させるのだ。

智樹は冷静に自分の置かれている状況を俯瞰して考えてみた。

こんな深夜に幻覚症状のある青年が見えない戦慄に臆しながら一人歩きしている。

これは第三者から見た場合、どう映るのであろうか。

夢遊病者か、挙動不審者か、そんなふうに映ってしまうのではないか。

万が一、警察官と出くわしたら、間違いなく職務質問の対象になるだろう。

警察官職務執行法二条一項に、職務質問を適法に行える人物の条件が規定されている。

異常な挙動その他周囲の事情から合理的に判断して何らかの罪を犯した、

もしくは犯そうとしていると疑うに足りる相当な理由のある者、とある。

彼は、まさに自分がその人物像そのものではないかと思った。

仮に職務質問に答えるとして、何と答えることができようか？

「今恐怖に追われて、それから逃げているのです」

とでも答えるのか？これでは完全に異常者ではないか。

そんなことではすぐに補導されてしまうだろう。補導は絶対に避けたい。だが、今の彼に警察官に事情を上手く説明し回避するだけの自信は無い。そんな器用な嘘、適当な模範回答が浮かばない。

このまま補導されるのか？いや、警察の厄介にだけはなりたくない。家族に迷惑を掛けるわけにはいかない。恥だけは知っているつもりだ。

智樹は確信した。警察官と遭遇したら必ず補導される、と。

彼は警察官という新たな恐怖に怯えることになった。

県道を歩くと目立ってしまうため、商店街の方へと進路を変えて身を潜めた。

まるで犯罪者だ。こんなにも警察官を畏怖するとは思わなかった。

たまに通る車をパトカーだと勘違いしてはその度に冷や汗を流した。

人間の思い込みとは実に恐ろしいものだ。

行動の反復によってその思い込みが強化されていき、

やがて彼は自分が本当の犯罪者だと錯覚するようになった。

また、行動の習慣化というのは条件反射を作り出す種である。

条件反射とは、経験や訓練によって獲得される後天的な反射行動である。

イワン・パブロフという生理学者のパブロフの犬の実験がその一例である。

パブロフは犬にベルを鳴らしてからエサを与え続けた。

犬はそのベルをエサの条件付けとして連想するようになる。

そうすると、犬はベルを鳴らしただけでエサを連想し唾液を分泌するようになる。

智樹の場合も車が通るだけで条件反射を起こし、恐怖を感じるようになった。

そして警察官への恐怖が増殖していく一方で、暴走族への恐怖も増殖していった。

警察官という現実的な恐怖が、暴走族というこれまた現実的な恐怖を

一緒に連れてきてしまったのだ。恐怖は連鎖していく。

レストラン・Jへ向かう途中の県道で擦れ違いざまに目が合った、

暴走族一行のあの一人が、あの糸のような一重の鋭い目のあいつが、

きつと自分に因縁をつけて仲間たちと復讐しに来るだろう。

そう思うと自分の身の危険を感じて虫唾が走り、震えが止まらなくなった。

警察官と暴走族。本来は相反するはずの両者が、今夜は同盟を結んでいた。

見えない何者かと警察官と暴走族と。

肉体的にも精神的にも疲労はすでにピークを迎えていた。

第六章 「悪夢の中で」

午前三時十六分。

生温かい風が吹きつける。体中、汗でベタベタしている。

夜空には二羽のカラスが弧を描いている。

智樹は洋食店のある、寂れた商店街を怖々と歩いてきた。

こんな時刻にここを通るのは悪趣味にも程がある。

街灯の灯りに無数の虫が集まっている。蛾も何匹か、はためている。

蛾の羽がぶつかり合う音がする。鱗粉が撒き散っていた。

少し歩くと切れかけた街灯が点滅し、バチツバチツとショートする音がする。

それ以外、音は無く静まり返っている。

閑散とした生気の無い場末のバーやスナック。ほとんどが廃業しているようだ。

当時の面影を残した錆びた看板だけが、むなしくも掛けられたままだ。

開業医が営むような小規模の内科や外科、歯科、眼科、皮膚科、産婦人科等、

点々と商店街の外れに立ち並ぶが、廃病院も中にはあった。

その廃病院はガラスが割られ落書きが目立ち、見るからに荒廃していた。

地球上で自分以外、誰もいなくなってしまったかのような空虚さだ。

まるで現実離れた悪夢の中を彷徨っているようだった。映画のワンシーンの主人公を演じているようにも感じた。

それほどまでにここはとてつもない異空間だった。

ただ、満月だけがそんな智樹を静かにじっと見下ろしていた。

歩いていると後ろの方からコツコツと靴の足音がして、誰かの気配がしたので振り向いたが、誰もいなかった。

また歩き出すと靴の足音がして、また振り向くと誰もいない。

その繰り返しだが、靴音は段々と近くで聞こえてくる。

「もう・・・誰だよ」

六回目に振り向いてそう呟くと、すぐ耳元で、

「オレだよ」

と、男が囁いた。この世のものとは思えない声だった！

「ぎゃあっ！」

絶叫し、残された力を振り絞って一心不乱に走り抜けた。

午前三時二十三分。

ドラッグストアへ向かうための踏み切りへと到着した。

「はあ、はあ・・・踏み切りか・・・また嫌な場所だな」

踏み切りを渡ろうとしたその時、

「逃げても無駄よ」

どこからともなく、幽かな女の声が出た。

智樹が辺りをゆっくり見回すと、線路の上に女が立っていた！

腹部のあたりから、どす黒くおびただしい臓器が無造作に露出し、ぼたぼたと血液が流出している。それを見た瞬間、鼻を衝くような強烈な腐敗臭がして、怒涛のように吐き気に襲われた。

「ううっ！」

あまりの衝撃に失神して、顔面蒼白でくず折れるように座り込んだ。

それから、どれくらい時間が経ったのであろうか。

おそらく数分だったのだろう。腕時計の針はほぼ進んでいない。

混沌の中で霧が晴れるように徐々に意識を取り戻していった。

あの女はどうした？線路に目を向けると、その女はすでに消えていた。

「やっぱり・・・やつらか・・・」

智樹はさっきの男の声、今見えた女の姿から、

これらの正体がダイナマイト自殺したあの男女の怨霊ではないか、と考えた。女の腹部のそれが何よりの証拠ではないか。死んだ姿のまま現われたのだ。

だとすると、何の怨みがあるというのだ？ 怨みを買った覚えなど無い。

やつらに殺されてたまるか。冗談じゃない。僕は生き延びてやるぞ！

僕はまだ死ねない。小説家になるといふ夢を残しては！

踏み切りを渡ると、ドラッグストアまで歩いた。

閉店後のドラッグストアは、広い駐車場の電灯だけがひっそりと照らされていた。

電飾看板は消灯され、あの眩い光が偽りだったかのように闇しか見えない。

こんなにも違うものだろうか。こんなにも変わるものだろうか。

あの時とはまるで生と死のように対極にある。これは死のメタファーなのか。

そう思うと憎かった。それならば、こいつも僕の戦うべき敵だからだ。

## 第七章 「疑心」

午前三時三十八分。

ドラッグストアから、ただひたすら一本道で続く山間のコンビニ・Kへ向かっていた。その時、その道を一台の車が通った。

「パトカーだ！」

歩道から離れ、林の中へと逃げ込んだ。

それはただのトラックだった。条件反射は未だに続いていた。

その後も車が何台か通り過ぎたため、しばらくは林の中に隠れ、

その車の波が途切れてから歩道へ戻ることにした。

波を読むことが大切だ、と何かの本に書いてあったことを思い出した。

確かそこに赤で傍線を引いていた、だから記憶に残っていた。

波読みの職人のように渋い表情でその波を読んでいた。

そして車の波が途切れた時、口を開いてこう言った。

「ここで素人なら、早まって出て行ってしまふところだ」

智樹はいつから玄人になったのだろうか。

彼は林の中に身を潜め、その波読みを続けた。

何の気無しに上を見ると、たくさん葉が夜の風にざわめいて揺れていた。

その葉が段々と人の顔に見えてきた。顔、顔、顔、顔。

四方八方に放射状に広がる無数の顔という顔が、ニタニタと智樹を見つめ嘲笑っている！

「あああああ！」

狂乱した悲痛な金切り声を上げて歩道へと逃げ延びた。

その瞬間、車の波がもろに押し寄せてきていた。

素人以下の波読みだった。林の中へとまた舞い戻った。

人間は三つの点があれば、それぞれ目と口として見る習性があり、

何かが顔として見えるというのは、このシミュラクラ現象のせいだそうだ。

無意識下に視界の中に顔らしきものを見出してしまっわけだ。

実際、心霊写真の多くはこの現象による錯覚がほとんどらしい。

ちなみに、これは赤ちゃんが最初に母親の顔を認識する必要があるために、重要な習性でもあり、なくてはならない習性だそうだ。

智樹はこの習性にまんまと操られた、哀しい操り人形だったのだ。

午前三時四十九分。

いつまで経ってもコンビニらしきものは見当たらない。

智樹の中で善からぬ疑心が次々に働く。

一時間前に電話で応答したコンビニ・Kのあの若い男の店員は、

やつら怨霊の手先の霊で僕は騙されているのではないか。

実はあの電話は全部嘘ですでにコンビニは潰れていて、

僕を山へと導くための口裏合わせではなかったか。

いかにも営業しているように見せかけ、僕を山へ誘ったというわけだ。

だが、潰れているコンビニがホームページに載っているのか？

その番号にこの手で電話を掛け、ちゃんと掛かったではないか？

いや、やつらはそれくらい能力は持っているはずだ。

きっとあのホームページも電話自体も、まやかさに決まっている。

しかし、あの洋食店のオーナーは確かにコンビニがあると云っていた。

何より、あの誠実そうなオーナーが嘘を付く人間には到底見えない。

きっと誠実を守り抜くがゆえに、某一流ホテルの料理長を自ら辞職し、

その商業主義的な体制から脱却したに違いない、それほど誠実さを持った、あのオーナーがそんな低俗な趣味は持っていないだろう。

いや、第一そんな嘘を付いて誰が得をするというのか。

もしかして、あの若く見える奥さんらしき人か？

恐らく、あの女がオーナーをそそのかし、そんな嘘を付かせてはそれを悦びにしているのだ。

あの若さを保つには、あの小悪魔的魅力を醸し出すには、そんな秘密の遊戯があってもおかしくはない。むしろ、無い方がおかしい。なんていやらしい女だ。悪の権化ではないか。

そもそも本当に奥さんだろうか？

いや、オーナーは何らかの弱みを握られていて、仕方なくあの女を雇い、

そして、そんな醜悪な秘密の遊戯に付き合わされているのだ。

なるほど、あのオーナーの人生の酸いも甘いも熟知した印象はそこから来たものだったのか。

收拾がつかぬほどのあらゆる疑心に苛まれた。

しかし、それがあまりに荒唐無稽なものであったため、とりあえずコンビニ・Kへもう一度電話を掛けた。賽はこうして投げられたのだった。

また、あの若い男性店員が電話に出た。

「はい、コンビニ・K北本町店です」

「あの、君は霊ですか？」

「はい？」

「いや、だから、怨霊の手先とかじゃないですよね？」

「イタズラ電話なら切りますよ」

「あ、待って！待って！」

「何ですか？あんた、一時間くらい前にも変な電話してきた人でしょ？」

「そうですよ。声だけでよくわかりましたね」

「こんな時間に電話してくるのは、あんたみたいな人だけですからね」

「ところでお聞きしたいのですが、お店のある場所を教えてくださいませんか？  
今、ドラッグストアから山道の方へ行ったところにいるのですが、

なかなか見つけられなくて・・・」

「ああ、それは元の店の場所ですよ。うちは移転しましたから」

「え？いつですか？」

「もう半年くらい前ですね」

「それで、今はどこに？」

「県道沿いにあるレストラン・Jって、わかります？」

「はい。わかりますけど？」

「そのすぐ先です」

「・・・あ、そうですか・・・ありがとうございます」

智樹はオーナーの教えてくれた、やや古い町情報に翻弄されていた。

もう半年も前にコンビニ・Kは移転しているというのに、

なぜそんなことすら地元に住んでいながら知らないのだ！

オーナーはもともと料理以外のことに、あまり関心が無い人ではなかったか。

職人気質の人に多いが、夢中になれるもの以外全く興味が無いのだ。

そういった人間は得てして、「浅く広く」より、「深く狭く」を求める傾向にある。

でも、オーナーに悪気があったわけではない。責めるのはお門違いである。

確かに情報は古かったが、親切に教えてくれたのは紛れもない事実ではないか。

むしろ、そんな善なるオーナーに対して疑心の念を抱いてしまったこと、

さらに奥さんであろう人をいやらしい女だ、悪の権化だとまで罵倒したこと、

失礼極まりないわけであって、オーナーの無知より自分の邪心を責めるべきだった。

それにしても皮肉なものだ。何というアイロニーだ。

あのレストラン・Jのすぐ先にコンビニ・Kがあったとは。

楽園の近くにもう一つの楽園はあったのだ。それも永遠の楽園が。

彼はそれを知らずに、逆側の県道沿いをあてもなく歩いていくことになる。

そもそも最初の電話で場所をきちんと確認しておけば良かったのだ。運命の悪戯としか言い表せない、そんな奇跡的な悲劇だった。

午前四時二分。

山道を後戻りし、ドラッグストアまで戻った。

時折通る車を恐れては林の中へ身を隠し、性懲りも無く、玄人然とした態度で波読みに臨みながら。

踏み切りが見える。あの女がいた踏み切りだ。

伏し目で踏み切りを渡った。なるべく線路を見ないようにして渡ったが、怖いもの見たさというのか、どうしても気になってそちらに目をやってしまった。幸いにして、線路には何もいなかった。

胸を撫で下ろして線路を渡った時、一台のバイクの音が聞こえてきた。

非現実の恐怖が現実の恐怖に変わった瞬間だった。

警察官か？はたまた、暴走族か？

音から判断して暴走族ではないだろう。ならば、警察官か？

音のする方を見る。暗かりにぼんやりと見えた。警察官のバイクではない。

新聞配達のおじさんのバイクだった。朝刊を配り始めていたのだった。

商店街へと消えていくおじさんの背中が何とも不思議と大きく感じた。

お父さんの背中は大きい、と言うが、見るものの主観的な見方の問題ではないか。

彼はそう悟った。この発見、学論が書けると思つた。

この例では恐怖を払拭してくれたおじさんへの恩が錯覚を起こさせて、

おじさんの背中が大きいように見えたのであって、決して大きくなど無いのである。

その実、おじさんの背中が平均よりもむしろずっと小さい。

それに気付いた時、詐欺にあつて損をしたような気持ちにもなるのだが、

おじさんだつて、こちらを騙すつもりで背中を大きく見せているわけではない。

ならば、こんな夜くらい背中が大きく見えることがあつてもいいじゃないか。

それが小さい背中のおじさんに対する、せめてもの優しさではないか。

おじさんもそれが本望だろう。今宵、おじさんの背中は大きい、のだ。

「今宵、おじさんの背中は大きいのだ」

声に出して言わずにはいられなかった。

しばし、智樹の目にはおじさんの哀愁漂つた背中が残像が、

蜃気楼のように浮かんでは消えていた。

第八章 「楽園、再び」

午前四時十五分。

県道沿い。レストラン・Jの先にコンビニ・Kは確かにあった。富士山の山頂が見えた、そんな気持ちに酔い痴れていた。

ちようどりユックサックも背負っているし、登山家気分だった。遂にここまでやって来たのだ。思えば長く険しい道のりだった。ここへさえ来ればもう大丈夫だ。もう怖がることは無い。

コンビニ・Kは移転して数カ月のため、真新しく綺麗な店だった。大型車が何台も駐車できそうな、広い駐車場が備えてある。

コンビニ・Kへ入った。ベルの音が店内に響く。

店内には誰もいなかった。客も店員も。

すると、レジ裏の扉が開いて茶髪の若い男の店員が出てきた。

「・・・いらっしやいませ」

勤労意欲の低いやる気のない声だった。

「あ、どうも・・・僕のこと覚えていますか？」

「はい？何ですか？」

「何度か電話した、ほら、あの、場所を聞いたじゃないですか？」

「ああ、あんたですか。今初めて見たのに、顔見てわかるわけが無いでしょ」

「まあ、それもそうですけど」

「で、何か用ですか？」

「い、いや何ていうか、その・・・ありがとうございます、と」

「は、はい。・・・それはどうも」

男の名札を見た。「佐々木」とあった。

智樹は佐々木にそう礼を言うと、雑誌コーナーへ向かった。

佐々木はそれを見届けると、またレジ裏へと戻った。

もちろん雑誌が読みたかったわけではなく、雑誌を読むということ、

この聖域、サンクチュアリーに、不自然なく居られるための口実を

手に入れたかったのだ。智樹は目の前の週刊誌を手を取った。

ベルの音が鳴った。作業着姿の配送業者の男が商品の搬入にやってきて、挨拶をした。

「お疲れ様です！」

すると、レジ裏の扉から何やらシフトの調整について話しながら、佐々木と

強面の五十過ぎの男性の店長らしき人が出てきた。そして、その店長らしき人が、その配送業者の男にやたらと親しげに挨拶を交わし始めた。とにかく強面の顔だ。威圧するような貫禄があつて、昔相当悪さしてきたような、そんな只者ではないオーラを放っていた。これは堅気の間人では無いなと思つた。

それから十五分が過ぎた。いくつかの業者が出入りし、何人かの客が来た。深夜のコンビニなど、あまり来たことがなかったので新鮮だった。

このコンビニで働いている人達といい、それに携わる配送業者の人達といい、人が寝ている時間にこんなにも働いている人がいるのか、と軽い感動を覚えた。深夜に働いていると言えば、さっきの新聞配達のおじさんもそうだ。

店内では、佐々木がポリッシャーと呼ばれる、床の洗淨作業、磨き作業等を効率良く行う電動式の清掃機械を回し、床清掃を始め出した。

立ち読みを続ける智樹は明らかにその邪魔になつていた。

当初朝までこのコンビニ・Kに居座るつもりだったが、

あまりに長居すると店の迷惑になりかねないな、と良心が痛み出した。

それに不審者だと怪しまれて警察に通報されかねない、とも思つた。

それだけでなく、もともと佐々木は智樹を警戒しているはずだ。

怪しい電話を二度もしている。きっと店長にも話しているだろう。そんな人間がここに傍若無人にも居座り続けるのだ。警察への通報は時間の問題だ。

そう言えば、さつきから佐々木と店長がこちらをチラチラと見ている。

これはまずい。一刻も早くここを出なくては。もうカウントダウンは始まっていたのだ。聖域を司る者たちよ、我はもう去るのだよ。我を許したまえ。

ジューズだけ買ってリュックサックに入れると、逃げるようにして店を立ち去った。

午前四時四十四分。

やはりこの世に永遠の楽園など無かった。

リュックサックからジューズを取り出して飲みながら、県道をとぼとぼ歩いていた。まだ夜は明けない。ただ、満月は幾分か低い位置に降りて来ていた。

レストラン・Jに近づくにつれ、あの暴走族のことをまた回想していった。

あいつの糸のような一重の鋭い目が智樹の妄想を駆り立てた。

犯人は犯行現場に必ず戻ってくる、と何かの本に書いてあったぞ。

これも赤で傍線引いた内容だから、はつきりと覚えている。  
ということはあいつらもここへと必ず戻ってくるというわけだ。

ならば、僕は今敵陣に一人、武器も持たずに挑むようなものではないか。奇を衒っているのか。危険過ぎる。コンビニへ戻ろう。あの店長ならきつと一喝してくれる。

そうだ、戻ろう。あいつらから僕を守ってくれるのはあの店長だけだ！

言っておくが、暴走族は犯人ではない。一体智樹は何を勘違いしたのだろうか。

午前四時五十一分。

二回目の入店をした。またベルの音が鳴る。

佐々木と店長は思わぬ再訪にお互いに顔を見合わせた。

智樹は怪しいと思われてはいけない、と先手を打った。

「あ、あの・・・すみません。実はですね・・・」

事情を話そうとした時、

「君、何？暇潰しで来てるわけ？」

店長が若干怒ったような高圧的な物言いで割り込んできた。

さすがは店長だ。やはりこれくらいの威圧があつてこそ店長だと言える。

「いや、そういうつもりでは一切ございません」  
変人と思われぬように出来るだけ紳士を装うことにした。

「じゃあさ、さつきから何なわけ？電話のこともね、佐々木君から聞いてるよ」

心の中で佐々木のヤツ、と腹が立ち、智樹は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「僕は怪しい者ではありません。まず、それだけは信じて下さい」

「だいたい怪しいやつはそう言うよね？」

「いや、本当です。信じて下さい」

「じゃあ聞いてやるから、話してみろよ」

「ありがとうございます」

智樹は都合の良い嘘を言ってもそれは墓穴を掘るだけだと思った。

この店長の迫力に動揺してすぐに嘘など見破られてしまうだろう、と。

ここは紳士的口調で正直に話すことにした。

「この近くに祖父母の空き家があって、そこに一人で泊まりに来たのですが、その空き家というのが、とにかく幽霊屋敷とも言いますか、不気味であり、様々な不可解な現象が起こるわけで、それでそこを飛び出したわけです」

「はあ・・・怖いかね？子供ならわかるかね。それで？」

「はい。それでレストラン・Jへ行って、深夜二時まで居たのですが、  
あちらは営業時間が深夜二時まででしよう？」

「なるほど。それでうちの店へ来たってわけだな？」

「そうです。迷惑は絶対に掛けません。だから、この夜が明けるまで、こちらに居させてもらうことは出来ないでしょうか？」

「ふんっ、好きにしろ。勝手にしやがれ」

智樹の真摯さが伝わったのか、店長は智樹のことを信用し受け入れた。智樹が感激し握手を求めると店長はそれに応え、がっちり握手した。佐々木はこの一連のやりとりを終始面白そうに見ていた。

午前五時二十五分。

朝は来た。日の光が射してきた。

ガラスの向こう、その変化に気付き、ページを捲る手を止めた。

「そろそろ時が来たみたいだ」

パンを持ってレジへと向かった。店長がレジを打った。

「店長！短い間でしたが、お世話になりました！」

智樹はそう言って深々と一礼した。

何だか、このコンビニ・Kが第二の家のように感じられ、

このまま朝が来なければ、ずっとここに居られるのに・・・と、  
あんなにも待ち望み、渴望した朝さえ疎ましく思えた。

ほんの僅かの時間だったが、何週間もホームステイしたかのような気持ちになり、  
内心、ここを出なくてはいけない、という定めが辛かった。

店長は智樹のその言葉に対して黙ったままレジを打ち、パンを袋に詰めて、  
彼に渡した。智樹が店を出ようと店の出口まで行った時に、

「君！」

店長が智樹を突然呼び止めた。振り返ると、

「・・・また、遊びに来いよ」

店長は照れ臭そうに言った。智樹は涙が零れ落ちた。

「ありがとうございます・・・必ず、また来ます」

泣きながら、震える口でそう言った。

それから、店長は続けてこう言った。

「・・・あと、俺は店長じゃないからな」

「え?・・・」

「ただのバイトだよ。去年リストラされてよ」

「あ、そうでしたか。それは失礼しました・・・」

智樹は今まで勝手なイメージでその男を店長だと思い込んでいたのだ。しかし、彼は間を少し置いて最後にその男に向かってこう言った。

「・・・あの、でも、あなたは僕の中ではずっと・・・店長ですから」  
今度はその男の目頭が熱くなった。

「バカ野郎が・・・」

智樹とその男との感動のフィナーレはこうして幕を閉じた。

商品の品出しをしながら、佐々木は必死に笑いを堪えていた。

## 第九章 「勝利の朝」

午前五時三十分。

コンビニ・Kを出た智樹はパンをかじりながら意気揚々と家へと歩いて帰った。鼻歌交じりにご機嫌な彼だった。

朝陽が昇ると同時にその光で全ての恐怖が浄化されていく気がした。

見えない何者かも警察官も暴走族も、もう智樹を追っては来ない。静謐は戻ったのだ。

「勝った！勝ったぞ！」

朝陽を指差し、勇ましく雄叫びを上げた。

智樹は一晚中あの恐怖と一人きりで戦い、見事に勝利を手に入れた。

勝利の美酒を味わったのは智樹であり、敗北の苦汁を味わったのは恐怖だ。

恐怖は死んだ。この陽の光に溶けて消え去ったのだ。

ミーンミンミンミン、ミーンミンミンミン

蝉が鳴き始めた。まるで勝利の凱旋パレードの音楽隊のようだ。

「ありがとう、君たちまで歌ってくれるなんてね」

智樹は幸福感に満たされていた。

道端で通りすぎる早朝のジョギングに励むお年寄り達に、

「おはようございます！」

と、自ら率先して気持ちの良い挨拶を交わした。

普段人見知りして挨拶も苦手な彼なのだが、この朝ばかりは  
自分から初対面の人々に挨拶が出来た。

朝を象徴する陽の光、蝉の鳴き声、お年寄りのジョギング。

これら全てが愛しかったのだ。こんなにも朝が愛しいなんて思いもしなかった。  
眩しいくらいの光の洪水を全身に浴びながら、朝への愛を深めていった。

町の風景は絵の具で着色されたように鮮やかな色彩を描き、

彩り豊かなその情景は一枚一枚が美しい風景画のようであり、  
歩いているだけで名画の展覧会を眺めているようだった。

生命力が漲り躍動感に溢れ、輝きに満ちた幸せな世界。

真の樂園とはこの朝にあったのだ。

午前五時五十五分。

蛇坂を登っていた。あの心霊相談所の前を通っても、

さらにはあの神社が見えても全く怖くなかった。

そして、あの幽霊屋敷へと遂に戻って来た。

ポケットから鍵を取り出すと鍵を開け玄関から中に入った。

カーテンで閉め切った家中は薄暗いので電気をつけた。

居間へと戻る。あの夜、飛び出したままの光景だ。

背負っていたリュックサックを放り出すと、

そこへ敷いてある布団へ雪崩れるようにうつ伏せになった。

「はあく、長い夜だった・・・疲れた〜」

うつ伏せになってから間もなくして携帯電話が鳴った。

体を起こし携帯電話を取り出し、画面を見た。

それは順一からのメールの受信だった。

「おはよう。昨夜は大丈夫だったか？」

順一はこの時間に毎朝起き、電車に乗って仕事に行っているのだ。

「まあ、何とか大丈夫だったよ。ありがとう！」

確かに過程は壮絶だったが、結果は無事である。智樹はそう返信した。

「あ、何か喉が渴いたな」

さつき食べたパン、クリームクロワッサンによつて、

口の中の水分という水分が奪われ、喉が猛烈に渴いていた。

何か飲み物が無いか見渡すと、目の前にお茶のペットボトルがあつたので、

それをガブガブと一気飲みした。そのままドバツと全部吐き出した。

「げっ！」

それは昨夜の智樹の尿だつた！非常に濃く苦い味だつた。

肉体的にもきつかつたが、精神的にもきつかつた。

何が悲しくて自分の尿を朝一番で飲まなければいけないのか。

言つておろが、一夜寝かしておいたつて美味くも何ともないからな！

自分の尿にそう教えてやりたかつた。

携帯電話は吐き出した尿の飛沫で、またびしょびしょだ。

どこの携帯電話が、買い立て三、四日目、二度も尿被害を受けるだろうか。

アンモニア臭はもう消えないだろう。ちくしょう。

不幸中の幸いで携帯電話の本体の色が、ロマンティック・イエローとか言うカラーだつたから、外観上の被害は最小には抑えられそうだが。

ドラッグストアのビニール袋から買い置きしておいた  
缶コーヒーを取り出すと、口直しにそれを残らず飲み干した。  
さっきの飲み物に比べると比ではない美味しさだ。  
それは今までの人生の中で一番美味しいコーヒーだった。  
あの洋食店で飲んだアイスコーヒーよりも、ずっと。

## 第十章 「来訪者」

午前六時二十四分。

立ち上がった縁側のカーテンを開け、窓を開けた。

さっきの尿でびしょびしょになった自分のシャツを天日干ししようと思ったのだ。

シャツを脱ぎ、庭にある物干し竿のハンガーに掛けて干した。

それから、持参していたポロシャツに着替えた。

外に目を向けると、そこには朝焼けに光る畏敬の念を抱くほどの雄大な自然の姿があった。

すぐに居間へと戻ると、リュックサックからカメラを取り出した。

そして、その被写体をカメラに押さえようとシャッターを押した。

しかし、シャッターを押しても写真が撮れない。

そのカメラの液晶画面にエラーメッセージが表示された。

「データ容量一杯です。データを削除してください」

それを見て思わず首を傾げた。

「あれ？確か新品のメモリーカードを入れておいたはずだけど」

この滞在生活に先駆けて新品のメモリーカードをカメラに入れたはずだった。

最大七百枚の写真のデータは保存可能なはずだ。それが一杯とはどういうことだ？

確か、ここへ訪れてからは夕陽の田園と満月の二枚しか撮っていない。その保存されたデータを液晶画面で確認してみた。

「おっ、綺麗に夕陽の田園も満月も写っているじゃないか」

自分が撮ったその二枚をデータの中に確認した。

「ん？何これ？これは・・・」

そこには撮った覚えが全くないものが写っていた。

それは智樹が蛇坂を必死に走って下っている後ろ姿の写真だった。

次の写真を恐る恐る見てみた。

今度はその恐怖に怯えた智樹の顔を正面から捉えた写真だった。

「まさか！」

そのままかだった。保存されたデータをざっと確認したところ、

智樹の撮った二枚以外の七百枚近い写真の全ては、

あの一夜、逃げ惑った智樹を被写体になっているものだった！

蛇坂、レストラン・J、県道、歩道橋、商店街、踏み切り、ドラッグストア、

山道、コンビニ・K、そして最後はシャツを干す智樹が写っていた。

「うわあっ！」

慄然として震え上がりカメラを座敷の方へ投げつけた。

そう言えば、あのレストラン・Jで見た白い光。  
あれはこのカメラのフラッシュではなかっただろうか。

「物を粗末にしちゃダメだって言っているじゃない、智樹」  
座敷に智樹の見覚えのある女性が現われ、そのカメラを拾い上げた。

「美咲、何でお前が・・・」

そこには智樹が長年付き合っていた元恋人の美咲が立っていた。

美咲とは高校時代に同じ写真部で知り合い、その後ずっと交際していた。

美咲が専門学校を卒業し、デザイン事務所に勤めるようになると同棲も始めた。

美咲は事務所から独立してフリーの写真家になる夢を抱き、

また智樹も小説家になる夢を持ち、お互いの夢をそれぞれ励まし合っていた。

ところが一週間前、智樹の方から一方的に美咲に別れを告げた。

それには智樹なりの訳があった。

美咲も、もう二十七歳だ。そろそろ結婚を考える年齢だろう。そう考えた時、  
将来性の無い自分なんかより、もっと美咲に相応しい男性がいるはずだと思った。  
その男性と一緒にいることが美咲の一番の幸せだ、そう考えて別れを告げた訳だ。

智樹は美咲を愛していた。だが、美咲を幸せにする自信が無かったのだ。これ以上、美咲の邪魔になつてはいけない。このまま美咲の傍に自分が居てはいけない。

智樹が携帯電話を新しく買ったのは、美咲のことを忘れてしまいたかつたからだ。番号もメールアドレスも思い出の携帯電話ごと一新したかつたのだ。

「ねえ、よく撮れてるでしょ？」

美咲は智樹が写っている液晶画面を見せながら、微笑んでそう言った。

「美咲……」

近寄ってくる美咲に全身が凍りつくような殺気を感じて、上手く呼吸することが出来ない。

「最後に一枚、どうしても撮りたい写真があるの……」

智樹のカメラを畳に叩き落とすと、美咲はバッグから自分のカメラをゴソツと取り出した。

「……な、何だよ？」

智樹はカメラを構えている美咲に向かって、萎縮しきった声で尋ねた。

「あら？……勘が鈍いのね、小説家志望さん」

美咲がそう言った瞬間、急激な呼吸困難に陥った。声ももう出せない。

「教えてあげる……それはね……」

意識が朦朧として身体が痙攣し始めた時、美咲がぼそつと告げた。

「智樹の死に顔・・・」

智樹は気を失い、白目を剥いてその場にバタツと倒れた。

まもなくカシャツと、シャッター音がした。

「本当、最高だね」

美咲は冷笑を浮かべ、そう呟いた。

僕は失った意識の中で美咲の声だけが聞こえていた。

「何で私を捨てたの？」

「私はずっと一緒にいたかったのに」

「私、智樹を愛してるのよ」

トゥルルルル、トゥルルルル、トゥルルルル

智樹は携帯電話の呼び出し音で目を覚ました。

気が付くと、汗びっしょりで布団に横になっていた。

一体どうなっているのだろうか？

トゥルルルル、トゥルルルル、トゥルルルル

携帯電話を手を取った。順一からの電話だ。

「・・・もしもし」

「お、トモか？お前、本当に大丈夫か？」

「え？」

「いや、メールしたのに返信が無かったからさ」

「あれ？すぐ返信したけどな」

「そうか？もう昼になったのに、返信が無いから心配になってさ」

「昼？今、何時？」

「えっと、今、十二時十五分だよ」

「だいぶ寝ていたようだね」

「昨夜は眠れなかったのか？」

「まあ、色々あつてね」

「帰ってくるのか？」

「ああ、自分には無理だったみたいだ」

「そうか。じゃあ、気をつけて帰ってこいよ」

電話を切ると画面が切り替わり、そこに映ったのは、

「まあ、何とか大丈夫だったよ。ありがとう！」

というメール文章作成の画面だった。あの時メールの文章を作っておきながら、送信ボタンを押すのを忘れてしまっていたのだ。

きっとそれほどもでに疲労困憊していたのだろう、と彼は思った。

午後十二時三十二分。

先程の不可思議な現象のことを洞察した。

そもそも、あれはどこから始まったのだろうか？

シャツはちゃんと干してある。ポロシャツには着替えている。

だとしたら、あのカメラだ。あのカメラから始まったのだ。

カメラは？カメラはどこにある？

リュックサックの中にあるはずのカメラを探した。

カメラはあった。カメラの中のデータを確認した。

夕陽の田園と満月の二枚だけだ。他には何も写っていない。

やはりあれは僕の中の夢の出来事ではなかった。

ならば、美咲はなぜ現われたのだろうか？

そして、なぜ僕を追い詰めたのだろうか？

それから、なぜ僕に最後にあんな言葉を掛けたのだろうか？

その時、僕はまた空気の異変を感じた。

「美咲さんを幸せに出来るのは君だけだ」

あの夜商店街の中で僕の耳元で囁いたあの男の声がした。

「もっと自分の可能性を信じるのよ」

今度は、あの夜踏み切りの線路に立っていたあの女の声がした。

その男女の怨霊は僕に続けてこう言った。

「君たちは一緒になるべきだ。本当にお互いに愛し合っているのだから」

「私たちみたいな現世で結ばれなくても結ばれなかった恋人達の怨霊のためにも」

「オレは君たちに幸せになってほしい」

「私だって貴方たちに幸せになってほしいわ」

「オレたちの叶わなかった幸せを手にしてくれ」

「私たち、遠くから応援しているわ。幸せになるのよ」

その後、その男女の怨霊の声は聞こえなくなった。

## 第十一章 「誓い」

午後一時二十八分。

滞在用の荷物をまとめて家を出た。

そして、あるところへ向かった。目の前にある神社だ。

あの男女の怨霊の言葉によって目が覚めたのだ。

頭をガンツと鈍器で殴られたように自分の弱さや甘さ、狡さに気付かされた。

自分には幸せにする自信が無いなど卑怯な臆病者が言う言葉だ。

勝負もしないで勝てる自信が無いと傍観しているだけじゃないか。

僕は幸せの傍観者にはなりたくない。

美咲を幸せにするために、そして、僕が幸せになるために、

この人生という勝負に愛という力で挑んでやるのだ。

「美咲と一緒に幸せになります」

そう誓って一礼した。智樹の背中はとても堂々としていた。

そして、あの夜の新聞配達のおじさん同様、智樹の背中は大きかった、のだ。

それはあの男女の怨霊の主観においてではあったが。

午後二時七分。

電車に乗り込んだ。

車窓から外の景色を眺めながら、不可解な現象の洞察をまとめ始めた。

美咲はあの男女の怨霊が自白した通り、怨霊たちが呼んだものだろう。

僕らの幸せを願って美咲を呼び出したというわけだ。

そして、あの狂った美咲は僕の恐怖心が作り出した幻想の姿だろう。

愛と憎しみは愛憎という言葉があるように、アンビバレンスなものである。

僕はどこかで美咲の愛が憎しみへと形を変えるのではないか、と怯えていた。

そんな深層心理がああ怪物を作り出した。想念が実体化したわけだ。

ただ、疑問が一つ。最後に僕に語り掛けたあ的美咲の声。

あれは一体何だったのだろうか。

僕の希望的観測が美咲に言わせた言葉だったろうか。

それとも、あの男女の怨霊が美咲に言わせた言葉だったろうか。

僕はそんなことを考えているうちに、睡魔に襲われて泥のように眠った。

不意にあの一夜のことが走馬灯のように駆け巡る。

たった一夜の出来事ではあったのだが、とても長い一夜に感じた。

一瞬が永遠を孕むような、そんな一夜だった。

第十二章 「愛する人」

午後五時四十三分。

地元の街へと着いた。美咲のアパートへと向かっていた。通り慣れた道に見慣れた風景があり、同時に思い出が蘇る。

二十分後、美咲のアパートへと着いた。

夕陽に照らされた階段を一段一段登る。二〇五号室が美咲の部屋だ。部屋の前へ着くと、一息ついてチャイムを押した。

ピンポーン

「はい」

インターホン越しに美咲の声がした。

「美咲か？僕だよ、智樹」

「と、智樹？」

美咲は驚いた様子でそう言った。

「僕は美咲にひどいことをしてしまった。今更かもしれないが、僕ともう一度やり直してくれないか？僕は美咲を心から愛してる。」

だから、お願いだ！僕とまた一緒にいてくれないか？」

「・・・・・・・・ブチッ」

インターホンが切られた。僕はもう再会すら許されないのか、と

その部屋の前に呆然と立ち尽くしていた。悲しくて悔しくて涙が溢れた。

その時、中から駆けてくる足音がした。美咲だ！

部屋のドアがガチャッと開き、美咲は泣きながら裸足で飛び出してきて、僕を強く抱き締めた。僕も美咲を強く抱き締めた。

「私も・・・私も智樹を愛してる」

僕と美咲は部屋へと入ると、そのまま愛し合った。

智樹と美咲は裸のままベッドで横になっていた。

「でも、不思議ね」

「え？何が？」

「私、昨晩ちように智樹のことを考えてたの」

「僕のことを？」

「そう。何で私を捨てたの？私はずっと一緒にいたかったのに。

私、智樹を愛してるのよ、ってね」

「え！・・・そうか。あの時の声は、美咲の想いから来る声だったのか」

「ちょっと、何？どういうこと？」

「話せば長くなるから、また今度ね。今日は実家に帰らないと」

「あ、ずるいよ。そうやって秘密にするの・・・あっ」

突如その美咲の口をキスで塞いだ。

「また、ゆっくり話すからね」

智樹はそう言うのとベッドから体を起こし、身支度を整え、

美咲の部屋を後にした。

午後七時二十六分。

実家へと歩きながら、順一に電話を掛けた。

「もしもし、ジュン？」

「おお、トモ」

「今、こっちに着いて実家へと戻ってるよ」

「お帰り。結構向こうでゆっくりしてたな」

「いや、実は美咲のところへ寄ってた」

「お前ら、別れたって言ってなかった？」

「向こうである人達に触発されてね。美咲とやり直すことにした」

「そっか！おめでとう。やっぱりお前らは別れちゃダメだ。本当お似合いのカップルだからな」  
「ありがとう」

「良かったな。佐恵も喜ぶと思うよ。また週末あたり四人で遊びに行こうぜ」

「そうだな。ジュン、本当にいつもありがとう」

「そんなのお互い様だろ。それじゃあ、またな」

頬を緩ませて電話を切った。

見上げれば、昨夜と同じ満月が昇りかけていた。

それはとても穏やかで優しい満月だった。

第十三章 「結末」

午後七時三十五分。

実家へと戻った。玄関のドアを開けた。

「ただいま」

そう言うと、智樹の母である幸江が玄関へ慌てて駆けてきた。

「智樹！おかえりなさい！」

「どうしたの？そんなに急いで」

「昨日の夜ね、丸川出版の東島さんという方から、うちに電話があつてね。あなたの書いた小説を単行本化したい、って！」

それは智樹が以前に出版社へ送った「音沙汰無し」の渾身の作品だった。

「え？本当に？それって、本当！？」

「そうよ、やったわね！お母さんも嬉しいわ」

「じゃあ、何ですぐ連絡くれなかったの？電話してくれば良かったのに」  
「智樹、最近携帯変えたでしょ？携帯が繋がらなかったのよ。」

東島さんも、あなたの携帯に電話したそうだけど、繋がらなかったの、うちの電話へ掛けたって言われてたわよ」

「あ、そうだったのか。それは悪いことしたな」

「それでね、あなたにどうやったら連絡できるかって考えて、お母さん、

あの田舎のお家に電話を掛けたのに、何度電話しても出ないから心配してたのよ」

「まさか、あの黒電話!？」

「そうよ」

「あれって、もう回線切つてあるはずだよね？」

「何言っているのよ。あれはお母さんの思い入れもあつてね。まだ回線残してあるのよ」

「あの三回の電話は母さんからの電話だったのか・・・」

「バカね、他に誰が掛けるつて言うのよ・・・それより智樹、何でこんなに

早く帰つて来たの? 田舎のお家で小説書くつて、あんなに意気込んでたのに」

「まあ、それは、その・・・黒電話に出られなかつたつていうことに要約されるかな」

「なるほどねえ・・・本当に智樹は子供の頃から想像力が豊か過ぎるのよ」

「そうそう、だから小説家になれたわけだ」

「調子が良いことばかり言つて。さあ、今夜はお祝いしましょう」

「腹ぺこだから助かるよ。あ、その前に東島さんに電話するね」

「そうね。その間にお母さん、とびきりの御馳走を作つてあげるから」

幸江はルンルンと軽い足取りでキッチンへと向かった。

その時入れ替わるように父の和夫が智樹の元へ歩いてきた。

「智樹・・・ここからがスタートだ。頑張れよ」

「父さん・・・」

寡黙な和夫はそれだけを言うと、またリビングへ戻って行った。

智樹は丸川出版の東島の携帯電話に電話を掛けた。

「はい、丸川出版の東島です」

「あ、もしもし、宇田川ですが」

「ああ、宇田川智樹さんでいらっしやいますか？」

「はい。すみませんね。せっかく携帯に電話を掛けていただいたのに。こうして連絡も遅くなつてしまいました・・・」

「いえいえ、とんでもない。それより、あなたの小説読ませていただきましたが、素晴らしいですよ。ぜひ単行本化させていただきたい、そう考えているのですが」

「それは嬉しい限りです。宜しく願います」

「それから弊社がこの度発行する新しい月刊誌があるのですが、そちらで、新作小説の連載をしていただけないでしょうか？」

「本当ですか!？」

「ええ」

「あの、実は今、新しい小説のアイデアが浮かんでいるところでして」

「それはタイミングが良いですね。弊社としても助かりますよ。それではまた打ち合わせ等々、こちらから再度連絡させていただきます」

最終章 「それから」

二ヶ月後、智樹の新作小説の連載は始まった。

新作小説のタイトルは、「妄想の一夜」。

それは智樹が実体験したあの一夜に着想を得て、執筆された小説だった。

智樹と美咲は二人でまた同棲生活を始めていた。

「お茶が入ったわよ」

美咲が智樹の執筆している机へお茶を運んできた。

「ありがとう」

智樹はそう言ったきり、なかなかお茶を飲もうとしない。

「どうしたの？」

「・・・これ、本当にお茶だろうね？」

あの時の飲尿の苦い思い出が未だに色褪せてなかった。

「あはは。もう。お茶に決まってるでしょ？」

智樹はそう言われて安心し、お茶をふと覗き込んだ。

「あっ、茶柱が立ってるよ」

「本当だ！すごい！」

美咲は感動し、自分のカメラを取り出した。

美咲はセルフタイマーで自分達の方へカメラを向けて、智樹の横に小走りで寄り添い、そして、茶柱が見えるようにして言った。

「ほらっ、茶柱と一緒に記念撮影よ」

「はい、はい」

カシャツと、シャッター音がした。二人は液晶画面に写ったその写真を見て、声を揃えてこう呟くのだった。

「本当、最高だね」

智樹と美咲と茶柱と。その奥には、ある男女の姿がうつすら写っていた。

想いの力とは計り知れない。それは、夢を叶える力、奇跡を起こす力。あの一夜を通して、想いの力はそれを証明した。

人間には想像力がある。想像力には無限の可能性がある。

それは恐怖とも言えるが、また希望とも言えるのではないか。(完)

著者略歴

津村 修二（つむら しゅうじ）

1983年福岡生まれ。日本放送協会学園高等学校卒業後、数社で営業職を経験。  
2011年に独立し、「ツムラクリエイション」を開業。現在、オリジナル  
すごろく、ボードゲーム、書籍の制作と販売などの事業を展開中。

## 津村修二 短編小説「妄想の一夜」

---

2011年10月8日 発行

---

著者 津村 修二

発行者 津村 修二

発行所 ツムラクリエイション

〒819-0031 福岡県福岡市西区橋本 2-21-3

<http://tsumura-creation.com>

お問い合わせ先 [info@tsumura-creation.com](mailto:info@tsumura-creation.com)

---

Printed in Japan

(C) 2011 TSUMURA CREATION All Rights Reserved.

◆本書は著作権法上の保護を受けています。著作権者およびツムラクリエイションによる事前の同意なしに、本書の一部あるいは全部を、無断で複写・複製、転記・転載することは禁止されています。